

海上の森でのシデコブシ保全活動の効果について

○井城雅夫、奥田理恵、金子大樹（環境活動推進課）、
清水美登里（自然環境課）、水口展子（尾張県民事務所）

1. はじめに

シデコブシはモクレン科の木本で、日本固有種である。愛知県、岐阜県美濃地方中・東部、三重県北部にだけに自生している。その自生地は丘陵地の貧栄養な湧水湿地やその周辺である。

都市周辺の丘陵地は開発圧力も高い。近年は二次林の薪炭林としての利用低下に伴い、高木に被陰され枯死する個体が目立っている。国レッドデータブックでは準絶滅危惧、愛知県レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類とされている。

海上の森でもシデコブシは高木の被陰により衰退の傾向にある。シデコブシを保全するために、2012年11月から企業のCSRとして春と秋に主に常緑樹の間伐を行っている。また、屋戸川の一部は、ギフチョウの保全のために業者に委託して2016年に間伐を行った。

今後のシデコブシの保全のために、これまでの保全活動の効果について検討した。

2. 方法

瀬戸市にある海上の森の寺山川流域、屋戸川流域（図1）のシデコブシを対象とした。株ごとに2015年から2021年までの各年の花芽の個数、果実の個数を計測し、シデコブシの株に対する間伐の効果調べた。2021年に株ごとに樹高と胸高周囲を計測した。

樹冠開空度を展葉期（夏季）、落葉期（冬季）に測り、間伐とその後の光環境の変化を調べた。株ごとの生育地の環境について、湿地内に生育しているかを調べた。シデコブシは貧栄養な湧水湿地に生育するため、2020年から2021年の四半期ごとに湿地の表流水の水質について調べた。

実生の数を2016年と2020年、2021年に調べた。実生に影響を与えていると思われるイノシシについて、カメラトラップを用いて撮影頻度指数を求めた。

3. 結果と考察

間伐により樹冠開空度の増加がみられ、光環境が改善した（図2）。湿地の表流水は、1998年の愛知万博環境影響評価による調査と比較して、貧栄養の湿地環境は維持されていると考えられた。

図3のとおり花芽の数は2年ごとの豊凶がみられたが、増加傾向にある。2015年と2016年の花芽数の平均と2020年と2021年の平均は、有意に増加していた。図4のとおり結実数も概ね2年ごとの豊凶の傾向がみられたが、増加傾向にある。2015年と2016年の結実数の平均と2020年と2021年の平均は、有意に増加していた。花芽の数の増加や結実数の増加から、既存のシデコブシの生育環境は良くなっていると推測された。このため、保全活動の効果があったと考えられる。

イノシシによる掘り返しが激しいため、実生への影響について検討した。図5のとおり2020年はイノシシの撮影頻度指数が減少しイノシシの掘り返しの影響が減ったとみられるが、実生の増加がほとんどみられなかった。

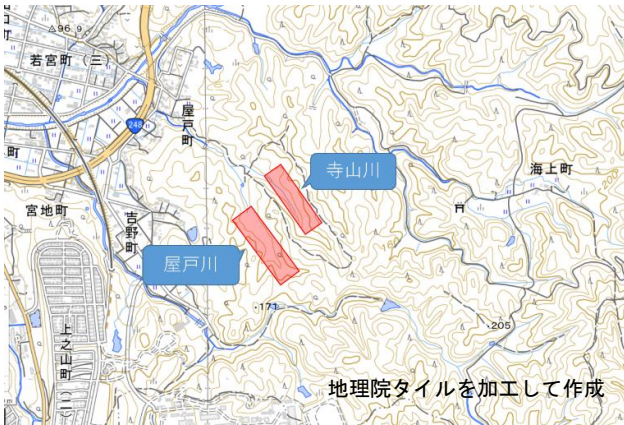


図1 調査範囲

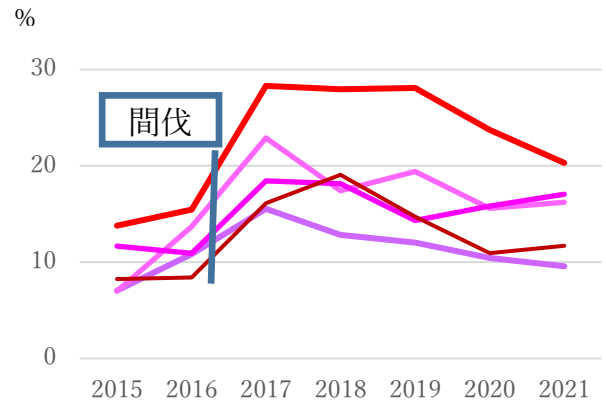


図2 調査区画ごとの展葉期（夏季）樹冠開空度

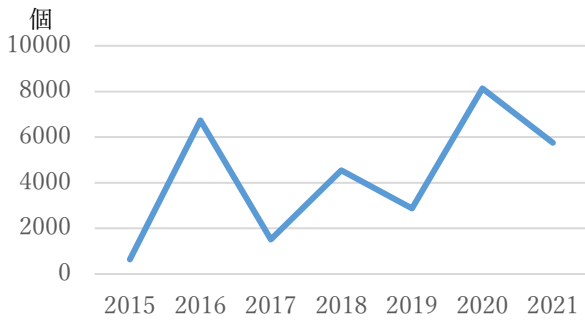


図3 花芽の数

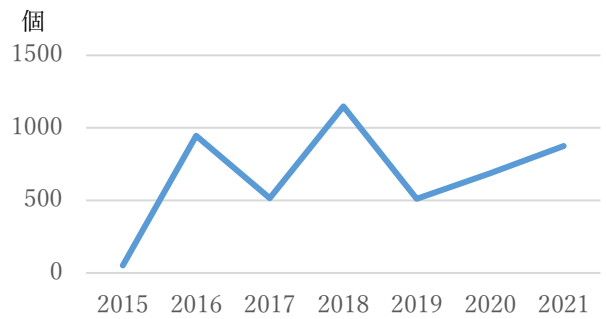


図4 結実数

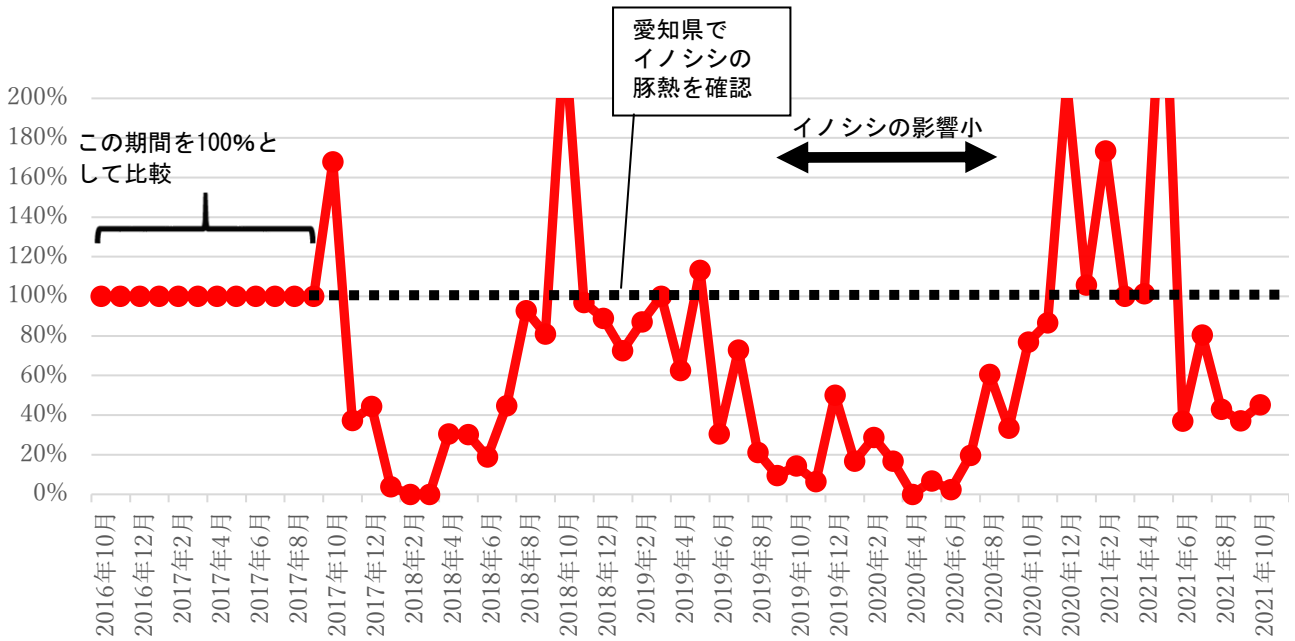


図5 イノシシの撮影頻度指数の変化